

太陽である僧——それはもちろん、ヘルメスの僧である。彼が占星術、錬金術、秘密的知識まで精通していることは明らかである。

カンパネッラにとって『太陽の都』は、スペイン支配によるイタリアの解放という政治的要因に端を発しながらも、また社会の思想や理念や体制の根本的変換、革命にそのモチーフがあったとはいえ、この変換や革命後のヘルメスの有機性に救済の意味がこめられていた。

『太陽の都』は終末に向けて書かれたユートピアであるが、そこには至福千年の思想を背景とした精神の救済の意味が潜んでおり、しかもそれが異教的なヘルメス思想を軸に展開されたのであった。¹¹⁰

3 カンパネッラの空間性

性愛の匂い

『太陽の都』を読んで私が第一に感じたのは、思想的範疇を越えた性愛の濃密な匂いである。『太陽の都』の文体は端正で、生殖行為の概念的な描写もなんら淫靡な趣はないのだが、そうやって、いわば白紙のように性が扱われれば扱われるほど、それだけエロチックに感ぜられ、樹液の滑りにも似たエロスが漂ってくる。

カンパネッラの七十一年の生涯のうち都合二十九年間も異端的思想の持ち主として牢獄生活を送った事実も影を落としているのかもしれない。青年期、壮年期と、三十年近い歳月、彼は己の性をどう処理したのであろうか。たとえ彼がドメニコ会の修道士だったとしても——。理想都市での統制された性行為を知るゆえになおさらなのだが、作品中のストイックな説明の陰に、どろどろした性的衝動を感得せずにはいられない。

牢獄生活を体験した人物によって書かれたこの作品は、前田愛もその著『都市空間のなかの文学』（筑摩書房、一九八二）で論じているように、獄舎のアナロジ—としてのユートピア文学であるという。

ユートピア文学が、閉ざされた空間、組織化された空間のなかで、人間の幸福を実現しようとする熾烈な夢想の産物であるとすれば、それはもっと深い意味で、牢獄という権力の装置とアナロジイの關係をもつことになるだろう。牢獄もユートピアもへ都市Vを母胎としてうみおとされた亜種にちがいないからである。

（前田愛『都市空間のなかの文学』）

この見解には首肯できるが、『太陽の都』を成り立たせているのは、こうした機能的なアナロジ—であるよりも、性愛の問題を生殖にのみ直結させてストイックに統制してしまう、カンパネッラ自身の内奥に潜む、抑圧の裏面としての禁欲ではないかと考えられる。つまりねじれたアナロジ—である。

女子は十九歳に達するまでは男子と同衾せず、男子は二十一歳までは生殖行為につけません。……

彼らは男子も女子も古代ギリシア人のように全裸で運動しますので、教師たちは誰が性的不能者であるとか性交に適さないとか、どの体が誰の体と適しているかなどを知ります。彼らはよく体を洗ってから、三晩ごとに交わります。……

彼らは大体において友情より生まれる愛しか知らず激しい性愛にかられた愛などは知りません。¹¹¹

宗教的ともいえる一定の理念に支配された禁欲的な性の営みであるが、生殖一点（優秀な子孫を産み出すこと）にその目的がある以上、背景には結合を希求する思念が顕在すると思われる。生命の尊重と維持であって、カンパネッラの言葉を借りればへ全体の生命Vの醸成と言えようか。

生命的存在が生き生きと活動しうる状態の都市、それが太陽の都の核心にある理念だと推察される（カンパネ

ッラは自然哲学者ベルナルディーノ・テレジオの影響を強く受けている。テレジオは、熱を物質の活力源としていた。そのためにこの都市はどのような構造をとるのが最適なのであろうか。

都の構造

その広い平原の中に一つの丘がそびえております。都の大部分はその丘の上に建てられているのですが、都をめぐる幾重もの城壁は、丘の麓のそと遠くまで拡がっています。都は直径二マイル以上で、周囲は七マイルあります。……

都はそれぞれ違った惑星の名前がついた非常に大きな七つの環状地帯からできています。人びとが、これらの地区の間を往來するために、東西南北四本の道路と四つの門があります。¹⁰⁷

おおかたの構造は把握できると思う。

七つの環というのは、ダンテ『神曲』地獄篇第四歌の、「私たちはとある高貴な城の城下へ来た。高い城壁が七重にそれを取り巻き、周囲を守って美しい小川が流れている」にも見られ、博識者カンパネッラは当然意識していたであろう。それよりも七つの惑星の名が冠せられている方がいっそう興味を呼び起こす。それぞれの城壁の外側と内側の壁には数学、世界地図、鉱石、地理、植物等の知識の説明が書かれていて、順々に巡っていかばおのずと知識が体得される、というわけだ。

知識が天文学上の名称と結びつけられており、たとえば少し前の北イタリアの自然哲学者ジェローラモ・カルダーノの、「月というのは、文法学の象徴である。水星は幾何学と代数学を、金星は音楽、占星術、詩を、太陽は倫理学を、木星は自然学を、火星は医学を、土星は農業、植物学、技術を象徴化している。天の第八圏は、上記の全学問の集大成、自然の与える叡智、その他もろもろの学問研究を代表している」と述べられた『自伝』の、知的営為を語った部分にも似ていて、マクロコスモス（宇宙）との一体を測ろうとする占星学的な配慮が看取される。

その中心は、コペルニクスの主張を支持したカンパネッラの場合、言うまでもなく太陽であって、知識とのアナロジーでいけば、神殿が充当し、都の中心に位置すべきものとなる。

太陽の都を側面から眺めれば、『神曲』の煉獄の構造と同じような形になり、俯瞰してみると天国篇の平面図に酷似する。神が中心にあって（ただし天動説を信じていたダンテは、中心たる神の御座所を太陽に置いていない。さきのカルダーノの場合も同様である）、九つの同心円が拡散していつている。

さらに円環のイメージは神殿の構造そのものにも影響を及ぼしている。

この神殿は完全な円形で、周囲に壁がなく、そのかわりに太くて非常に美しい円柱に囲まれています。大きな円屋根の真中にさらに小さな円屋根があり、そこに明かり取りの天窓が付いているのですが、これは神殿の中央にただひとつ置かれている祭壇のちょうど真上になっています。神殿を囲む円柱の周囲は三百数歩少々で、円屋根を支える円柱の外側には八歩の幅の柱廊があります。この柱廊には外壁に沿って椅子が並べられ、壁の高さは椅子より少し高いくらいです。また神殿を支えている内側の円壁は仕切り壁がなく、この間にも、持ち運びできる椅子がたくさん置いてあります。

祭壇の二には、空全体を描いた大きな天球儀と、地全体を描いた大きな地球儀があるだけです。また丸天井には、空の主な星がすべて描かれ、それぞれ名前がしるされると共に、地上の物体との関係が三行の韻文で書かれています。なお天極、子午線、緯線も描かれています。全部ではありません。と申しますのは、天井は下半分がありませんからね。ですから、祭壇の上の地球儀がこれを受けついで完成させているのです。また、

七つの星の名前をもつ七つの灯明がいつもともされています。

(傍点——澤井)

少し引三が長くなったが、傍点を付した円を表わす言葉の何と多いことか。

神殿の位置からは、「(太陽の都のある)丘の頂上は大きな平地になっていて、その真中に大きな素晴らしい神殿が建っています」と記されているように、都を一望のもとに鳥瞰することができる。神殿にもし私たちが付むとすれば、ヘリコプターの前頭部のような透明なカプセルに入って、上へ近づいてくるに従って小さくなる同心円状の山を展望することになる。また、神殿内では宇宙との交信も可能なのだ。いや、地上の物体の存在理由が宇宙との関係においてはじめに認められている。

この円環を基とした魔術的思想が作品中のその他の知的風景を培っていく。

たとえば学問を学ぶ際の姿勢では——

君たちは文法とかアリストテレスの論理とかその他諸学者の論理を他人よりよく知っている者を識者と考えていますが、これにはただすぐれた記憶力のみが必要なのであり、この結果、人は消極的になってしまいます。というのはそのような人は現実の事実を考えず、書物によってのみ考えるので、魂は死んだものの中であって生気を失い、また、神による万物の支配の方法、自然と諸国民の習慣などについては何も知っていません。こういふことは、私たちの「太陽」にはあり得ないのです。多くの学問に精通し得る人は、あらゆることに対してすぐさま頭脳が働き、その結果常に統治に最適な人となるからです。私たちは、また、ひとつの学問をも知らず、本を通じて学んだたったひとつの学問にしか適さない人間は、役に立たない愚鈍な者であることも知っています。

アリストテレスが批判されているが、カンパネッラは一五九二年から翌九三年にかけてパドヴァに遊び、ガリレオ等と交友を深め、反アリストテレス的な新しい科学思想になじんだと言われている。のちに獄中で『ガリレオの弁明』*Apologia pro Galileo* (一六一六)を書いてガリレオの唱えた地動説を支援するに至っている。

引用文中の批判はアリストテレスの論理面に留まっているが、自然科学思想(宇宙観)にせよ論理学にせよ、カンパネッラの言いたいことは、硬直化した教条的な学問姿勢、暗記と化して形骸化した学問それ自体の内実への警告なのである。

創造的で弾力性のある思考、知識が求められるのであって、さらに付け加えるに、「学芸は知的なものも技術的なものも、男女共に習得し」、「職人たちを無知と呼び、何も習わないでなまけていて、多数の召使いを無駄に使い国家に損失を与えている人びと」を指弾して、頭と手の協働を主唱する。

これは知が技と離れて一人歩きするのではなく、知と技が有機的に結託して知技全体として成立することを意味する。つまり机上の知識では不十分で、一見、知とは無関係に思われる日常生活の中の技術や知恵をも学びとるうというもので、こうして形成された知は、他のさまざまな知とも有機的に結び合える可能性を秘めている。知は有機的に円環するのである。

その具現化が『太陽の都』の都市構造に顕われている。

第一の城壁の内側には……数学の図式が、その定義や定理と共に描かれています。外側には世界地図と、あらゆる地方の地図が……

第二の城壁の内側には、ありとあらゆる宝石、普通の石、鉱石、金属などが標本と図で示され……外側の壁には、あらゆる種類の湖沼、海洋、河川が描かれ……

第三の城壁の内側には……第四の……第五の……第六の……第七の……
子供たちは十歳になるまでに絵を通じて遊びながらすべての学問を習得してしまうのです。¹⁰

こうした発想は多分に幾何学的であり、ダンテにも遡りうるイタリア人に固有な円環による時空認識が息づいている。またこれは『太陽の都』という作品の生命主義的な核心理念のアナロジであり、このアナロジの方から核心を望めば、円環の思想は日輪のように輝いて見える。象徴といっても過言ではあるまい。

魔術観

『太陽の都』の支配者たちは、形而上学者で「全市民の精神的・政治的指導者」である「太陽」を頂点に、「ボン」と呼ばれる「権力」、「シン」の「知識」、「モル」の「愛」の三人が補佐官として仕えている。これなども三位一体のキリスト教思想のアナロジであり、この都が神政共同体をとっている証左であって、神殿の位置からも推察されるように、神を理念的根拠に据えている。万物の根源たる神は、それ自身意志をもって、自己を中心に回転している球のイメージを宿している。

太陽は、光、熱、その他あらゆるものの本体である神の象徴であり、神の顔にほかならないからです。……彼ら（市民）は神の最高の力で、そこから最高の知識が生じ、その両者から最高の愛が生じるのだとして、三位一体の神を礼拝しています。¹¹

理想に燃える情熱の人カンパネッラは、当時スペインに支配されていた故郷南イタリアに原始キリスト教的神政政治による共産主義的共和国を樹立しようと反乱を企て、結局失敗してしまうのだが、『太陽の都』にはその想いがこめられているのである。私が惹かれるのはカンパネッラの熱意もさることながら、反乱計画を占星術によって割り出したことなのだ。

地動説を支持したカンパネッラの内部において、占星術や魔術はどのような位置を占めているのか。この問いはきわめて重い。今すぐに適宜な応えなどどうてい述べられない。

ここでは『太陽の都』の核心理念に沿って考えてみたい。

月と火星と金星の影響により、新世界の発見や地球を一周する素晴らしい方法の発見、女性による支配などがおこなわれ、水星と火星と木星の影響により、印刷術と鉄砲の発明がされました。¹²……

地上の諸事がやはり天体との関連において存在の根拠を与えられている。しかしこれよりも、次の、

彼らは人間の自由意志を大切にします。¹³

という一文が彼の魔術観をよく表わしていると思われる。なぜなら、魔術とは自己実現の手段であって、ガレンも言うように、「存在の内面に働く力や事物の内部の動き廻っている精神に耳を傾け」るのが魔術師だからである。

太陽の都に住む人たちは各自がみな自由意志を抱いて、円環的な知を糧として自己実現を目ざしている（汎知主義）。彼らにとってアイデンティティとは知技合一の生活知であり、天体、つまり全宇宙との一体感、調和なのである。

ガラスについた水滴は表面張力を得て球体を形づくり、安定する。

都市も球を維持することで永遠に生き残れるのかもしれない。球を微分すると円環が得られるが、カンパネッラは一個の円に生命を授けて象徴にまで高め、そのアナロジーを増殖しつつづけていったのではないだろうか。

4 カンパネッラの地動説

ガリレオとの出会い

一五九九年九月、トンマーズカンパネッラは、反教会、反スペイン主義を標榜し、理想主義的な国家建設を企図した革命をみずから主導した。しかし蜂起は失敗に終わり、カンパネッラは逮捕されて、以後一六二六年までの都合二十七年間の牢獄生活を強いられることになる。この革命蜂起のときに構想された都市国家像が、『太陽の都』に描き出された。以上のことはすでに述べた。

彼はこの革命において自分をあくまで預言者として位置づけていて、裁判でももっぱらそれを強く主張したが、受け容れられなかった。獄中では独房のわりに火を放って狂人を装うことで死刑をまぬがれようとしたり、へんげの刑も含む苛酷な拷問にも必死で耐え抜いたりした。

軟禁状態のときも含めて、とにかく彼は著述に専心したと伝えられ、全生涯を通じて遺された書物は八十八巻にも及ぶと言われている。論理学、形而上学、自然学、神学、魔術、医学、経済学、言語学、歴史学等、その著述範囲も広く、大半が獄中時代に執筆されたものなのである。

これから扱う『ガリレオの弁明』*Apologia pro Galileo* (一六一六年)もその中の一冊である。

一六〇八年から十四年まで、カンパネッラはナポリのカステル・デル・オーヴォの牢獄に軟禁され、訪問客とも応接できる状態にあった。だが十四年十月、狂人であるはずのカンパネッラの様子があまりに正常すぎるので、聖エルモ城の牢獄に移され、四年間に互るみじめな生活を送るはめになった。

こうした苛酷な事態の中でも彼は筆を折らずに書きつづけ、神学をはじめとして修辞学、詩学、医学、弁証論、占星術らの著作を著わした。この時期のカンパネッラに外部から書物は与えられておらず、自著への引用はすべて記憶に恃まざるをえなかった。

『ガリレオの弁明』もこの時期の所産なのである。

ガリレオとは一五九二年北イタリアのパドヴァではじめて出会っている。

この年二十四歳のカンパネッラは、所属するドメニコ会から、異端的な自然哲学者テレジオの見解を放棄して滞在中のナポリを一週間以内に離れ、アルトモンテの修道院に戻るように言い渡されていた。というのは彼は二十歳のときにベルナルディーノ・テレジオの『事物の本性について』*De rerum natura iuxta propria principia* (一五六五―八五)を読んで決定的な影響を受け、それ以後テレジオの信奉者となっていたからである。

テレジオの哲学では、自然界のあらゆる物に生命が宿り、それぞれそれなりの感覚が付与されている。森羅万象で起こる現象は、太陽からもたらされるへんげと、大地からのへんげとといった、二つの相対立する力のせめぎ合いによると考えられた。

アリストテレス的な宇宙(自然)解釈を正統としていた当時のカトリック教会にとって、テレジオ的解釈は当然異端として映るわけで、この思想を引き継いだカンパネッラが異端視されるのは成り行き上あたりまえのことだった。

一五八九年カンパネッラは、テレジオの反アリストテレス主義を擁護する『感覚によって確証された哲学』*Philosophia sensibus demonstrata*を書き、二年後の九十一年に上梓したほどであった。

こうしたカンパネッラであるから、ドメニコ会の仲間とうまくいくはずがなく、ついにナポリ滞在中に獄に捕えられてしまったのである。そこで彼は前述のように、アルトモンテの修道院に帰るよう勧告されたのだが、結